

256 $Tc-99m$ 磷酸化合物による全身骨シンテグラムの equivocal accumulation について
国立がんセンター R I

○ 小山田 日吉丸
照井 頌二

$Tc-99m$ 磷酸化合物による全身骨シンテグラムは、骨病巣を集積像として抽出してくれるため、日常の診断に大変役立つ。しかし症例によっては、所見が有意であるとすべきかどうか判定しにくい場合があることも事実である。

今回われわれは、昭和 50 年度に全身骨シンテグラムをとった担癌患者の中から、読影時に equivocal と判定した症例について、その個所が実際にどのようなものであつたかを検討したので報告する。

該当症例は 45 例 (55 箇所) あつたが、検討できたのは 34 箇所である。最も多くみられたのは腰椎の 10 例で、次いで肋骨 9 例、関節およびそのふきん 6 例、胸椎 4 例、頸椎 2 例、頭蓋 1 例、腸骨外縁 1 例、仙骨 1 例であつた。

腰椎 10 例中では転移が 1 例において確認されたが、9 例については現在までの X-P や剖検等から転移を否定されている。その内 5 例は degenerative change と考えられた。肋骨については 9 例中約半数の 4 例が転移によるものと考えられた。関節およびそのふきんの 6 例については、転移によるものが 1 例 (寛骨臼) で、3 例が degenerative change と考えられ、1 例には異常はみつかつておらず、他の 1 例は耳下腺腫瘍近傍の顎関節領域にみられたものであつた。頸椎は 2 例とも転移によるものであり頭蓋と右腸骨外縁の各 1 例についてはその後の経過からは異常が指摘されていない。

257 転移性骨腫瘍に関する研究、第 1 報 軸骨格への転移を中心として

大阪府立成人病センター

○ 中野俊一、長谷川義尚、梶田明義、
石上重行

悪性腫瘍の骨転移部位と原発腫瘍との間には位置的關係があると言われ、たとえば以下報告する肺癌、乳癌などにおける椎骨への転移は脊椎静脈系を介する場合があると説明されている。しかしながらこれらの報告は剖検所見、或は X 線検査に基くものである。我々は ^{99m}Tc 磷酸化合物を利用し全身スキヤン法により骨転移の有無並びに転移巣の分布と原発腫瘍との関係について検討中であるが、そのうち現在までに得た成績を報告する。

研究方法、症例は最近約 3 年間に大阪府立成人病センター R I 科において骨スキヤンを行った 308 例で、その内訳は肺癌 105 例、乳癌 111 例、子宮癌 17 例、前立腺癌 18 例、その他の癌 57 例である。骨スキヤンは ^{99m}Tc -EHDP 或は MDP、10~15mCi 静注、3~6 時間後に東芝 GCA 202 型ガンマカメラの全身スキヤン装置で前後 2 方向からスキヤンし、異常集積のみとめられる部位については、さらに静止像で詳細にしらべた。全身の骨を頭蓋骨、椎骨、胸骨、肋骨、上肢骨 (肩胛帯を含む)、及び下肢骨 (骨盤帯を含む) に分け R I の異常集積の有無を検討した。

研究成績 a) 骨スキヤンで異常集積をみとめ、骨転移と診断された症例は、肺癌 34 例、乳癌 32 例、子宮癌 6 例、前立腺癌 6 例、計 78 例である。異常集積部位の数については 1 カ所の症例は肺癌 20 例、乳癌 10 例、子宮癌 3 例、前立腺癌 1 例、計 34 例で 2 カ所以上のものは 44 例である。前立腺癌の 1 例では全身の骨系統に一律な集積の増加がみられた。

b) 異常集積部位の分布は次表の通りである (症例数)。

	肺 癌	乳 癌	子宮癌	前立腺癌
頭蓋骨	5	11	0	1
頸 椎	3	7	0	2
胸 椎	9	18	0	3
胸 骨	2	5	0	2
肋 骨	12	15	1	4
腰 椎	5	17	5	4
上肢骨	9	3	0	1
下肢骨	14	8	3	5

即ち軸骨格を構成する頭蓋骨及び椎骨への転移は肺癌においては肺癌の約 2 倍の高値を示す。また肺癌では胸椎に最も多く、乳癌では胸椎と腰椎はほぼ同程度で、子宮癌及び前立腺癌では腰椎に最も多い。上肢骨及び下肢骨への転移は、乳癌は肺癌より少く、軸骨格の場合と反対の傾向がみられた。